

火星



七曜抄

山尾玉藻

まだ朝の椎の花掃く芝居小屋

風を呼ぶ御祓の竹の立てられし

尉と姥くぐり直せし茅の輪かな

水無月の木の間をとべり
赤棟やまか蛇がし

胸の辺の薔薇剪る音のさびしかり

瓢棚どうのかうのと出来上がる

月に這ひ出しでで虫の太りやう

落し文掌にころがせり昼の酒

河内野の月待つ墓の背中なり

三人の日傘の一人立ちどまる

火星作品

山尾玉藻選

屋の湯に桜じめりの身をひたす

大和郡山

城

孝子

灌仏や赤穂に潮の満つる音

それぞれの糸に地あり糸桜

てつぺんは蕾なりけり花御堂

梨咲いて母にピンクの肌着あり

花篝まで二三歩の袴かな

八幡飯塚系子

山ごもる風でありけり栗の花

松咲くや女人高野に杵の音

引き返す風のありけり芝桜

歯並びの横顔めでぬ桜鯛

明石戸栗末廣

貰はれて暗がりを嗅ぐ仔猫かな

腕の子の平らに眠るみどりの日

ハンガーを鴉が運ぶ夕ざくら
ぶらんこにたむろしてゐる同窓生
日当るや旧かなづかひの種袋
一川のまつすぐ八十八夜寒
まづ影が波に乗りけり流し雛
夏うぐひす母の枕に寝足りけり
磯畑の乾く狐の牡丹かな
昏れなづむ花林檎まで送りけり
地震はるか夫はるかなり豆の花
おばあちゃんには違ひなけれど花
花水木夫の選びし日傘して
病室の窓あいてゐる桜かな
天皇の横顔美しきお種蒔
壬生狂言判じかねたる二人なり
松の芯水銀灯に育ちけり
木の国の春蟬に風止まらずなり
流れ橋を戻つてきたる春日傘

兵庫 田中英子

豊中 野澤あき

八幡 大山文子

選のあとに

山尾 玉藻

昼の湯に桜じめりの身をひたす 城 孝子

温泉地での一時であろうか、「桜じめりの身」とは美しく趣のある言葉である。快い疲れを浸す「昼の湯」は至福の一時でもある。

花篝まで一二三步の袴かな 飯塚 糸子

この「袴」は巫女などの女性の袴よりも男性の方が抑えが効いて良い。「花篝」へ歩いてゆく一瞬を捉えた景であるが、クローズアップされる袴が美しい。

病室の窓あいてゐる桜かな 野澤 あき

場所設定が特別なわけでもなく、言葉も優しい。それ故に類句がありそうな気もする。こう言う句を選ぶ時はいつもそれが気掛かりであるが、どちらか迷った時は取上げるようにしている。この句の「桜」は重く感じられる。

松の芯水銀灯に育ちけり 大山 文子

「水銀灯」は今殆ど見かけない。街路燈としての設定で

あろうが、放つ光の白がこの句には叶っている。「水銀灯に育ちけり」の断定に大いに納得させられる。

桜蕊ビニールシートにびつしりと 木野本加寿江

ビニールシートは白ではなく青色の方が良い。「びつしりと」とは一雨の後に貼り付いている情景である。美しさの後の残骸であるが、これもまた桜の本質である。

花吹雪鴉一羽になつてゐし 米澤 光子

先程は四、五羽いた鴉が何時の間にか一羽になつていたのである。もとより一羽であつたものと一羽になつたものでは、詩の構成の違いは大きい。これもまた美しい景である。

山峡はすでに水張る桐の花 廣畑 忠明

山深い棚田では裏作をする事が少なく比較的早くから代田の用意をする。村自体が潤いを得た感じで景も一変する。水が張られた事で棚田の端の桐の花が殊更静かで印象的。

天守まで上がるつもりの花衣 丸山 照子

天守閣まで上がるにはエレベーターなどが備わっていないとて急な階段だけである。この花衣の人が同伴者か見知らぬ人かはどちらでもよい。作者は階段に足を掛けた所を見止めたのであろう。俳諧味充分である。

春の昼船屋の奥のうごきをり 小川 成子

「奥のうごきをり」だけを言うによく見かける表現であり、短詩型の宿命とも言える。勝負はその上に来るもので決まる。「春の昼」「船屋」共々良い。秀吟である。

花仰ぐ男女おんなじ病衣きて 清水 ミチ

〈白き手の病者はかりの落葉焚 波郷〉が浮かんだ。掲句、表現は稚拙だがむしろそれが効果的である。同時発表作の〈勧められ花の筵の人となる〉〈杖をつき肩をかりたる落花かな〉も佳句である。

花明り花暗がりや咲き充つる 土屋 酔月

火星内で格調ある句を作れるお一人である。吉野などの夜桜を想像すると良い。咲き充ちていながら一片の落花もないのである。但しここでの「や」はやや立ち過ぎる嫌いがある。

捨て枝の形に蛸蚪の並びをり 大石 芳三

枯枝などが偶然に浮いていたのだろう、それを抛り所に蛸蚪が並んでいる様子である。どうも蛙と言うのは産みっぱなしで子の面倒を見ぬものらしい。「形に蛸蚪の並びをり」の写生が良い。

どんつきの乗馬倶楽部の落花かな 村上留美子

どんつきに乗馬倶楽部があることを作者はもとより知っていたのであり、そこには厩舎や部活部屋があるのだろう。その前は遠目にもぬかるみ光っていたことだろう。「どんつきの」の働きが美しさを増長している。

足裏に疲れ茅花の流しかな 助川 弘子

茅花流しは足許を感じさせる風、足裏の疲れもここに來るまではさほど感じなかったのだろう。むしろ心地良さによって感じ取ったのだ。足許に茅花流しの高さを絞った所が良い。

遠く来てくらげをつつく春日傘 山口三子
漂へる水母を返す春日傘 大城戸みさ子

類句と言えば類句に違いない。しかし前者の「遠く来て」に抒情があり主観的である。対し後者は即物的且つ客観的に捉えている。両句共捨て難い所以である。

春野にて無口の夫が役に立ち 重見 久子

何故「無口の夫が役に立ち」なのかと問われても解らないが、なんとなく納得させられるから不思議である。掲句が川柳でなくあくまでも俳句であるのは、ここに作者が居り人生が見えるからである。好感持てる俳諧である。

玉藻俳句鑑賞

待たせたる人に蟬殻貰ひけり 玉藻

〔火星〕平成十五年八月号より

約束をされていて時間通りに行けないというのはつらいものである。遅れてやっと着いた時に待たせた人から蟬殻を手渡されたのだ。

同じ蟬の殻でも「空蟬」ではない。情緒的な「空蟬」と即物的な「蟬殻」とではその語感と本意に大きな差がある。あつげらかんと手渡された「蟬殻」が多くを語っている。

（高子）



恒星圈

長屋璃子

浅蜩鳴く波のかたちの殻負ひて
瞬きを忘れし魚や春惜しむ
山河の青き充足夏隣
囀りや喝采しぼし天降りけり
庭石のぬくもり冷めず蠅生まる

戸栗末廣

野澤あき

河鹿鳴く高野の山のふところ
水割つて河馬が頭を上ぐさくら蕊
菩提寺の籠のしめりし春落葉
ゴルフ球に近寄つてくる春の鴨
春潮を見る少年の喉仏

花万朶子は十八才のままなりし
葉ざくらやむかし海軍航空兵
桜の夜ダンボール箱を家として
県庁や日章旗揺れポピー揺れ
マヌカンに男が着せる夏の服

戸田春月

浜口高子

青葉潮岬と岬呼び交はし
五月鯉讚岐うどんに腰のあり
金丸座の棧敷波だち春の闇
薄暑かな町で出食はす投句箱
くろがねの坊ちやん列車に春の逝く

雉子の声に覚めたりシャツの衿の糊
誰もぬぬ車にベルやいぬふぐり
水門の開かれ嫁菜鶯菜
花どきの墓石に夫の名の入りぬ
八十八夜富士嶺つぎつぎ雲吐ける

獅子座

山尾玉藻推薦

丸山照子

次の間に花嫁のゐる春障子
おとなりの赤子這ひきし花筵
道間ふと陽炎ふ方を指しにけり
起ち転ぶ子に花つむじ花つむじ

長田曄子

金婚となる日確かむ初暦
一病を諾ふ夫の祝箸
莖立を過ぐる男の独り言
束ねある分葱無骨に提げ来たる

小林成子

晩春のオリーブパンの匂ひけり
細き枝ゆらせる猿の日永かな
足許にヘルメットあり壬生の鉦
鉄塔の脚のあはひの春の星

西畑敦子

軋みゐるペットボトルの風車
レガッタの崩してゆきぬ花筏
滴せるレガッタ担ぎ花の下
酔ひ早き昼酒なりし桜の実

堀義志郎

ダンブカーの修理に来たり山桜
花立ての水を放りし犬ふぐり
百円傘買ひに駆けをり花水木
頭病む眼でありし豆の花

城尾たか子

穏やかな光となりぬ山法師
鶯の啼き継ぐ山に遊びけり
ゴンドラの揺るるたび春深まりし
帰るとき花増えてゐし山法師

高橋芳子

花の昼夫のケトルの鳴りはじむ
いち面の犬ふぐりにて悲しめり
身を反らし胸に載せたる春の山
花過ぎの能勢に吹く風突きにけり